

サハリンにハクチョウを追って (1995年)

— 日本白鳥の会の皆さんと共に —

谷 口 明 郎

日本で冬を過ごす約5万羽の白鳥は春になると、一旦、北海道東部の野付湾や濤沸湖、クッチャロ湖などに集まり、4月中頃から北の繁殖地へ向かいます。日本白鳥の会では、せめてサハリンまで後を追っかけて見ようじゃないか、ということで今回の旅は実行されました。家を出たのが4月30日、帰ってきたのは5月9日。向こうにいたのは5月2日の朝から7日の昼頃まで。越冬地の日本から極北の繁殖地へ向かう白鳥の旅に合わせて、私たちの日程も組まれていました。2日早朝、コルサコフ港に入港、入国手続きの後直ちに貸切りバスで、オホーツク海に面したオホツコエ近くの湖、トナイチャ湖に向かいました。

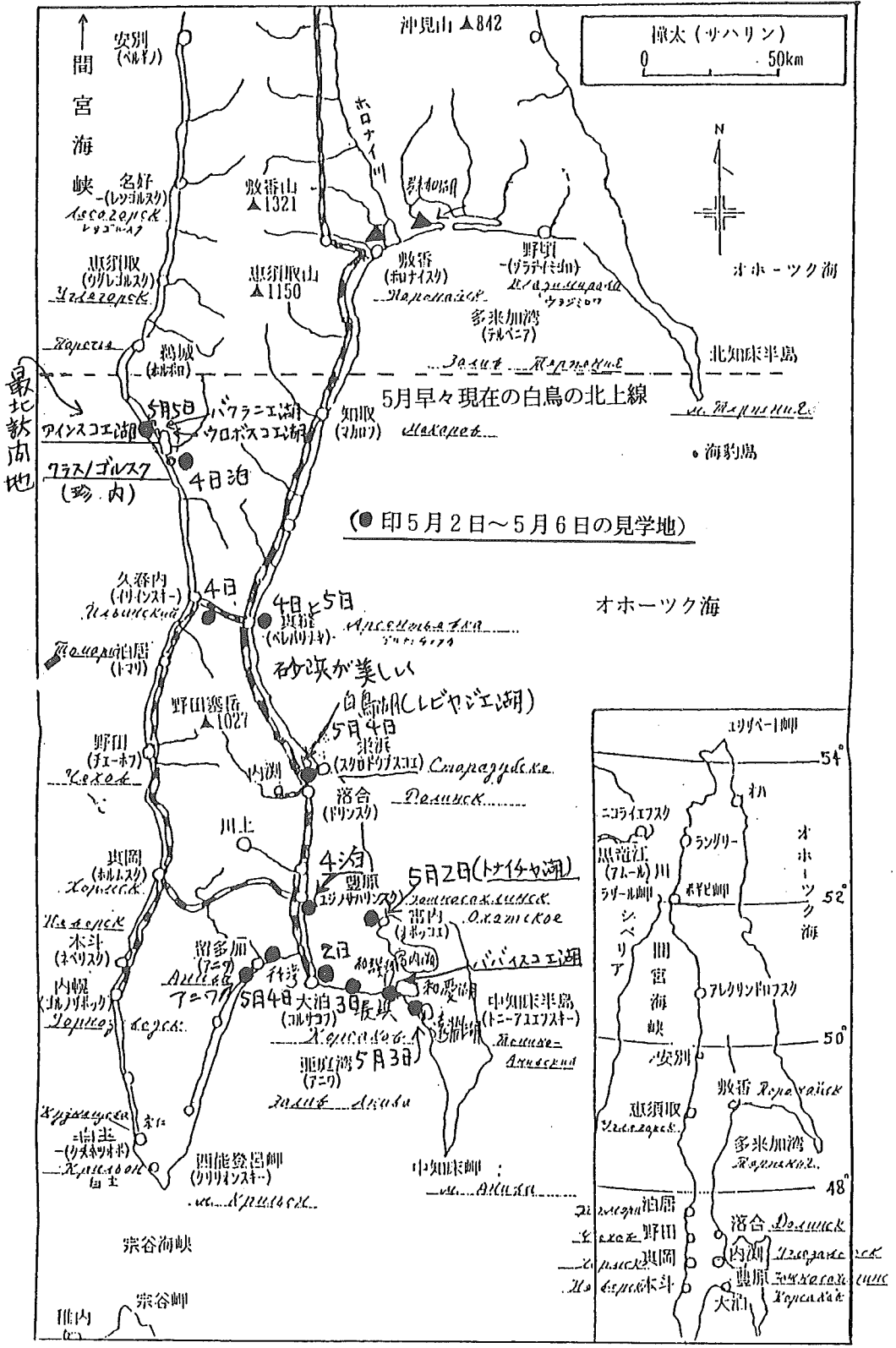
エゾマツ、トドマツ、シロカバ、また、カラマツ林の中を走る主幹道路に沿ってあちこちに、ミズバショウとフキノトウが咲いています。見慣れたものに迎えられ、旅の心も和みます。サハリンの州都ユジノサハリンスク東方、1000m級の山々は白く輝いていますが、木陰や凹地に少しは残っているものの、道路や平地に雪は既にありません。肌を感じる気温も、一昨日までの日本内地と変わらず、北国にも春は訪れていました。この調子だと快適な旅が出来そうで、まずは、ほっとしました。

サハリンに白鳥と野鳥の姿を追う私たちの旅路は、2日現在のトナイチャ湖から、3日はコルサコフ市東方のババイスコエ湖付近。4日には、アニワ湾の最奥部と西岸寄りのアニワ付近見学の後、北上してドリンスク、スタロドブスコエ、白鳥湖など見学、オホーツク海沿岸を北へ走り、ベレバリナヤから鉄道に沿って間宮海峡側に出て、北方60kmのクラスノゴルスクで一泊。5日は、今回の最北訪問地、かつてオオハクチョウの繁殖地であったアインスコエ湖を訪ねます。6日は州都見学と自由行動。

当初は、ホロナイスク方面まで(▲印)足をのばすつもりでしたが、同地は融雪期で歩きが困難ということで、一部計画を変更しました。

地図上の●印が今回の足跡です。全体の印象としては、サハリンの自然はまだあまり傷ついているとは思いません。日本が支配した40年は、いわば手作業の時代でした。しかし、これからはゴミも溜まるし、問題の時代を迎えることになるでしょう。

以下ご参考までに、道中、仲間の人たちが確認した鳥の種類と、旅の概略をまとめてみました。



道中で確認できた鳥（場所は地図参照）

- 4月30日～5月1日 船上から（ロシア船・サハリン7号/5,000t、船籍はホルムスク）ウミウ、ヒメウ、オオセグロカモメ、クロガモ、ウミネコ、ウミスズメ、ウミオウム、ウミガラス。
 - 5月2日 入国後、オホツコエ湾、トナイチャ湖方面へ向かう。
オオハクチョウ、オオジシギ、ハジプトガラス、カワラヒワ、キンクロハジロ、ホオジロガモ、オジロワシ、シロカモメ10羽、夏羽のカモメ、ハクセキレイ、ハシボソガラス、帰途、湖内の氷上にアザラシ（イズメンチボエ湖・この湖からは治療用の泥を採っている）、湖畔にハマニンニク、ハマナスなど多し。往復の沿道、いたるところにフキノトウ、ミズバショウの花、ヨモギ、ウドも出ている。ハジプトガラス繁殖中
 - 5月2日 アニワ湾（最奥部）に戻ってから ヒバリ、マガン17羽、オナガガモ、ツグミ。アニワ湾には最盛期にオオハク、コハク合わせて約6万羽が集まる。遠浅の湾内には、アマモ、コアマモ（海水中に自生する顕花植物）など餌は無尽蔵。
 - 5月3日 ユジノサハリンスクからコルサコフまでの間
スズメ、ハシプトガラス、ハシボソガラス、オオジシギ、カワラヒワ、オオセグロカモメ、セグロカモメ、ハクセキレイ、ヒバリ。
 - 5月3日 海辺にて（コルサコフから東へ“女麗海岸”）アカエリカイツブリ、ウミカイツブリ、ケイマフリ、キジバト、カワラヒワ、カモメ。
 - 5月3日 ババイスコエ湖（和愛湖）～遠淵湖付近 オオハクチョウ17羽、ホオジロハクセキレイ、オオジュリン、トビ、アオサギ、カワラヒワ、ハジボソガラス、オジロワシ、オオワシ、シジュウカラ、マガン7羽、マガモ、オナガガモ、ウミアイサ。オオワシ、低いエゾマツの頂点に静止後飛び去る。旧トウフチ村跡付近の沖にオオハクチョウ3～400羽、和愛湖面に氷あり、砂美しい。
 - 5月4日朝9時10分 私たちのホテルの近くの上空をマガン約400羽が北へ向かったという。（ホテルの私の部屋で、八木 博さんの話）
 - 5月4日 アニワ湾奥部、昨年藤巻教授が1週間滞在した宿舎付近 オオワシ、ツメナガセキレイ、コサギ、沖合オオハクチョウ、オオジシギ、オジロワシなど多し。アニワ湾に近い（鈴谷川河口付近）には、一昨日（2日）までオオハクチョウ約2万羽がいたが現在約2百羽、目の前で一部が北へ飛ぶ。シロチドリ、スズガモ。
- ★近くの流れの小さな土橋の上から、土地の人たち数人が30～40cmのアメマスを釣っていた。また、河口に近い海辺では、明日からのカモ猟解禁に備え数人のハンターが罠のデコイ（カモの模型）を用意してテントを張っていた。彼らの中年の一人が少し驚いた様子で近づく私に親しみのある笑顔を向ける。話を聞けば、彼が昔世話になった下宿の親父さんに私がよく似ていると言う。せめて、もう少しロシア語が自由に話せたらなあ…と思う。（傍らの藤巻教授に助けられる）
- 5月4日、午後3時半 白鳥湖（地図参照） ハクチョウ約2万羽（遠くてオオハク、コハク識別不可）、マガン数百、ハクセキレイ2羽、カラフトムシクイ。
 - 天気晴朗、砂浜の美しいオホーツクの海岸線をベレバリナヤまで約50km。ダイゼン、ユリカモメ、

そして、セグロカモメも繁殖期を迎え、交尾の姿が見える。

- ベレバリナヤから鉄道に沿って（最も短いところ）サハリン島を西へ横断。所要時間約1時間。途中のシラウラの町（駅近く）でトイレ休憩。石炭の出る町。
- クラスノゴルスク近くの湖 マミチャジナイ、オオジュリン、カシラダカ、ミサゴ1羽が飛ぶ。皆で記念撮影。孫へのみやげに美しい小石と貝を拾う。クラスノゴルスクという地名は「赤い山」という意味。
- 5月5日早朝 アインスコエ湖へ 画家のユーリーさん（ハンターでピアノも弾く）と地元のハンター2人が私たちのバスに同乗。湖畔で老生、スケッチ（肖像）してもらう（頼んだのではない）。一旦、クラスノゴルスクの街へ引き返し、カフェで朝食の後、再びアインスコエ湖へ向かう。ここは昔、オオハクチョウの繁殖地であったという。ミヤマホオジロ5羽。バスを降り湖までの1kmあまりを歩く。エゾマツ、カラマツの生える湿原の道、ホソバノエゾツツジ、ミズゴケ、名も知らぬコケ類が美しく所々にガンコウラン（ガンコウラン科、常緑の小木、10~25cm）の群落。ツグミ10羽ばかり、歩く前を飛ぶ。
- 湖が見える手前、残雪の上にエゾライチョウの糞を老生発見。ノロジカ（Manchurian deer・むかし中国東北部で良く見た）と思われる糞も目につく。ウサギの糞を少し扁平にした形の美しい樺色で乾燥しており、これも孫のみやげにとポケットへ。エゾライチョウのは、雪どけの水分で形がくずれ拾えなかった。ハハハ。再び先のカフェに戻り昼食。
- 5月5日午後 バクラニエ湖（鵜の湖）、ウロボスコエ湖は共にアインスコエ湖の北に続く小さな湖。湖の向こうに輝く雪山がまぶしい。山の名も教わった。ミユビゲラ、キクイタダキ、所々にツグミが群れる。カラフトアオアシシギが1羽。日本海が見える小高い砂丘の草むらに、村瀬正夫さんと二人、寝ころんで一服。

★以上のメモには、記入漏れや誤記もあると思います。次回の会報『日本の白鳥』で今回の成果が発表されることになっています。後日正確を期したいと思います。

お許しください。

★サハリンのカモ猟については、全島（サハリン州）を南北3つの地域に分け、カモの北上（繁殖地に向かう）に合わせて南から順次、1週間から10日間づつ、北の地域へとずらして解禁されることになっています。合理的に行われていると思いました。

★アンドレさんの話では「サハリンの白鳥は東側、中央部、西側に分かれて北上する。テルベニア湖（▲印）付近のものはホロナイ川に沿って北上する。サハリン北部から一部はハバロフスク方面へ。大部のものは北のオホーツク海へ。サハリン北端の西側で、オオハクチョウ約50羽が繁殖している。北端付近はアマモなど餌が極めて豊富にある。北端からの飛び立ちは例年5月21日頃」とのことでした。

★5月7日朝8時半。昨夜はよく眠れました、帰国の朝です。3階のホテルの窓から見下ろすレーニン通り、鉄砲を担いで歩くハンターを、ジョギングの女性2人が追い抜いていきました。なるほど、今日は日曜日でした。午前中をベッドで休み、昼すぎ、レーニン像のある近くの公園へ出てみました。10歳前後の少女が4人、公園に生えているリュウキンカに似た黄色い花を摘んでいました。すぐに馴れて、この子たちを相手に、しばし時の経つのを忘れました。いい気分でした。

★このホテル（サハリン・サッポロホテル）には、5月4日を除いて2日、3日、5日、6日と4日泊まりました。日本のホテルなどに比べ、部屋も風呂場も洗面所、トイレも2倍以上の広さ、本当にゆったり寛げました。私の部屋はホテル玄関の真上に近い3階でレーニン通りを行き来る人々を飽かず眺めていました。6日の朝は、軍楽隊と共に陸軍、海軍、空軍兵士たちの行進も見ました。明日7日は、去る大戦でドイツ軍を追い払った記念日なので、行事の予行でしょうとの話。通りは、両側の歩道を含め幅50mぐらいでしょうか。街路樹のほか民家や商店もシロカバ、ヤチダモ、ドロノキなど、林の中に街があるといった感じ、芽吹きの頃ともなれば素晴らしいことでしょう。

以上（原文は5月27日記）

追記 ●5月28日未明、サハリン北部の石油の町ネフチェゴルスクで起きた大地震で大変な犠牲者が出ています。多数の死者のほか、行方不明者が2千5百人とも3千人とも伝えられます。市街地は瓦礫の山です。「他人（ひと）の肩は軽く見える」といいますが、今の私たちは違います。阪神大震災を体験した私たちには、隣国の不幸が他人事とは思えません。救出活動はどうなっているのか、まだ氷点下にもなるという寒さの中、被災者はどうしているのか。●阪神大震災では、支援を受ける立場から、国際的な助け合いについて教えられました。地震発生直後から多くの国が支援を申し入れてきて、“世界の常識”を改めて知りました。むしろ日本政府の受け入れの遅れが問題になったほど。ロシアからの支援申し入れも地震当日でした。●ロシアといえば、震災救援で日本は大変無礼をしたことがあります。関東大震災（1923年・当時、私は小学校4年生）の時、医師や食糧を積んできたロシア船「レーニン号」を、横浜港沖から追い返したのです。救援物資の受け取りも拒んで。天皇の国が赤色のロシア物品を受け取れるか、と。●恥ずかしいことでした。人間同士の助け合いに国境はありません。まして今、私たちは阪神大震災で同じ悲しみを味わったばかりです。悲しみを知ると、優しくなれるといいます。何か力になりたい。テレビで惨状を見て、そう思います。ただ、国内と違い、個々人が簡単に動ける訳ではありません。公の機関が、国民の善意を束ねる方策を考えてほしい。国として出来るだけの支援は当然です。同じ地震の巢の上に連なる隣国同志であれば、相身互いです。●今日も、親しい村の老人から「サハリン行き、地震に遇わなくて良かったなあ」と言われました。前にも阪神大震災について少し書いたことがあります。私事で恐縮ですが、私は兵庫県出身のため、阪神地方には従兄弟姉妹夫婦など70歳以上の被災者が6人います。その中の、中学卒業するまで一つの家で育った78歳の従妹（3年前、医者亭主を亡くして一人暮らし）が4月早々、ひょっこり訪ねてきて4晩長野の拙宅に泊まっていきました。「急に顔が見たくなった」のだそうです。●人の生命も紙一重。私も、地震にも遇わずまた生きのびました。サハリン行きも、体を運ぶのが至上命題、息子のバカチョンカメラ一つだけ、商売の双眼鏡さえ持っていきませんでした。消極的ながら自衛第一に考えました。おかげ様で天気にも恵まれ、実に快適な旅を味わうことができました。“生かされている”という感謝の気持ち一杯の今日この頃です。有り難うございました。